

# 古代沖ノ島祭祀とガラス製品

福嶋 真貴子

## 1. 沖ノ島とは

沖ノ島は、福岡市博多港から北西へ約77km、<sup>げんかいなだ</sup>玄界灘の真っ只中に浮ぶ周囲4kmの絶海の孤島である。宗像大社の御神体で、太古より海に生きる人々から信仰を集め、海外交流の歴史の中にあつた。島への信仰が深まる中で、女人禁制、島へ上がる際の禊、島での見聞の口外無用、島内のものの持出厳禁などの禁忌が現れ、現在も厳守されている。

宗像大社は、沖ノ島に鎮座する沖津宮、福岡県宗像市の離島大島に鎮座する<sup>なかつぐう</sup>中津宮、本土の宗像市<sup>たしま</sup>田島に鎮座する<sup>へつぐう</sup>辺津宮の三宮から成り、『日本書紀』本文に従い、沖津宮に<sup>たごりひめのかみ</sup>田心姫神、中津宮に<sup>たぎつひめのかみ</sup>湍津姫神、<sup>いちきしまひめのかみ</sup>辺津宮に市杵島姫神をお祀りしている。宗像三女神については『古事記』『日本書紀』に誕生や降臨、さらに神威が述べられており、ヤマト政権が記紀編纂前に、朝鮮半島や中国大陸へと導く玄界灘を要地としてとらえ、この海域を渡る航海術を有する宗像君とその一族、三女神への信仰を重視していたことがわかっている。

## 2. 沖ノ島国家祭祀

昭和29年（1954）から昭和46年（1979）に実施された宗像大社復興期成会による3次の沖ノ島学術調査では、沖津宮社殿の北側に広がる巨岩群に、23カ所の大規模な古代祭祀に関わる遺跡と約8万点の絢爛豪華な奉獻品が発見された。この祭祀は、東アジア情勢の緊迫化によって4世紀後半から始まったヤマト王権と朝鮮半島諸国さらに中国王朝との対外交渉に深く関わる国家祭祀であることが明らかとなった。約8万点の出土品は現在すべて国宝に指定されている。

沖ノ島の国家祭祀遺跡の特徴は、遺跡の形態が岩上→岩陰→半岩陰・半露天→露天と変遷するのに伴い、奉獻品の内容が推移することにある。つまり、4世紀後半から開始した国家祭祀は、岩上祭祀—岩陰祭祀—半岩陰・半露天祭祀の段階を経ながら、神が降臨する巨岩を「<sup>いわくら</sup>磐座」として信仰する形態から、次第に巨岩から離れていく形態に変化し、8世紀に始まる露天祭祀の段階で、地上に祭壇を築く、のちの社殿出現につながる形態となる。この変遷の中で、奉獻品は、鏡や武器、装身具（玉類など）を中心としたものから、鏡が減少していき、<sup>ひながたひん</sup>鉄製雛形品（武器・工具・円板）や滑石製模造品（<sup>かっせき</sup>釧・<sup>くしろ</sup>円板・<sup>くしろ</sup>剣形品・玉）、馬具が加わり、さらに土器、金銅製雛形品（<sup>ひとがた</sup>人形・<sup>ひとがた</sup>紡織具・容器・円板・楽器）、滑石製<sup>かたしろ</sup>形代（<sup>うまがた</sup>人形・<sup>ふながた</sup>馬形・舟形など）が現れてくる。加えて、折々で、ヤマト政権の対外交渉を反映する貴重な海外の文物が奉獻されている（宗像大社復興期成会1979）。

ここで、沖ノ島祭祀の4段階変遷について、時代区分・該当遺跡・出土品など詳しい特徴を述べると次の通りである。

### 岩上祭祀段階（16～19・21号遺跡：4世紀後半～5世紀）（写真1）

沖ノ島祭祀の最古の形態は、巨岩を神が降臨する「磐座」として、岩上に、中国の漢代・魏代の舶載鏡ぼくさいきょうやそれを模した仿製鏡、装身具（玉類、腕輪形石製品）、鉄製武器、滑石製模造品こもちまがたま（子持勾玉ほか）、鉄鋌てつていなどをささげるもので、奉獻品がヤマト王権中枢の大型古墳副葬品に通じる点が重要である。特に、70面を超える銅鏡は、九州には類を見ない畿内の上位層の古墳副葬品に匹敵する量と内容で、ヤマト王権が沖ノ島祭祀を直接的に主導したことを裏付けている。



写真1 岩上祭祀段階（21号遺跡）  
祭壇を復元した写真。第3次調査では検出された石組などの情報を基に祭壇の復元を試みた。

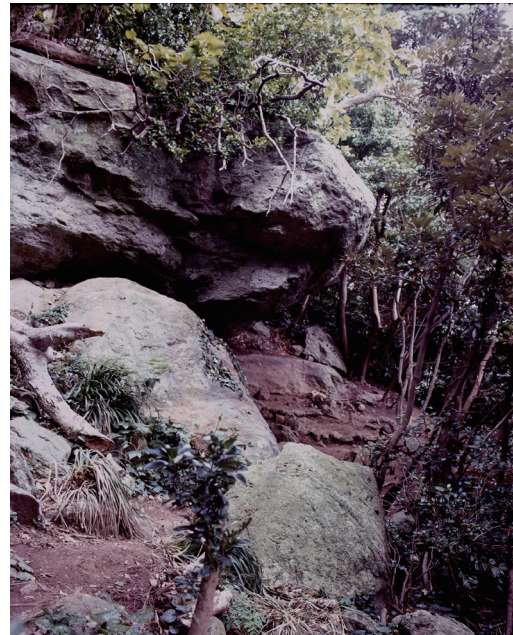


写真2 岩陰祭祀段階（22号遺跡）



写真3 半岩陰・半露天祭祀段階（5号遺跡）



写真4 露天祭祀段階（1号遺跡）

### 岩陰祭祀段階（4・6～13・15・22・23号遺跡：5世紀後半～7世紀）（写真2）

5世紀後半になると、遺跡は岩上から岩下の岩陰へと移る。奉獻品は、銅鏡が減少する一方で、鉄製武器・武具・工具や金属製雛形品、滑石製模造品などが増えてくる。朝鮮半島新羅しらぎの技術要素をもつ金銅製馬具や金製指輪、鑄造鉄斧、西域サーサーン朝ペルシャ伝来のカットグラス碗といった舶載品も含まれる。

### 半岩陰・半露天祭祀段階（5・20号遺跡：7世紀後半～8世紀前半）（写真3）

律令時代に入ると、遺跡が岩陰の外まで広がり、遺跡の大部分が露天となる形態、巨岩から離脱しつつある段階へ移る。注目すべき奉獻品は、中国の東魏代の可能性をもつ金銅製龍頭<sup>りゅうとう</sup>と唐代の唐三彩長頸瓶で、舶載品の奉納が中国系へ移行する。また、土器や金属製雛形品などが急増し主体になるため、この段階は律令祭祀の萌芽期と考えられている。

### 露天祭祀段階（1～3号遺跡：8世紀～9世紀）（写真4）

最終段階になると、巨岩から離れた露天の緩傾斜面に、南北10m×東西9mの方形祭壇状施設を築くようになる。奉獻品には、奈良三彩小壺、滑石製形代（人形・馬形・舟形など）、多種多量の土器、皇朝銭などがある。この段階で律令祭祀の様子が色濃くなっていく。

## 3. 沖ノ島出土ガラス製品について

### 3.1 概要と特徴

沖ノ島祭祀遺跡出土のガラス製品は、カットグラス碗片、ガラス製玉類（切子玉・小玉・丸玉・粟玉・勾玉・管玉）<sup>(1)</sup>があり、そのほとんどは、4段階の祭祀形態のうち、岩上祭祀・岩陰祭祀段階にささげられたものである。

カットグラス碗片（写真5）はガラス製容器の破片で、岩陰祭祀段階の8号遺跡遺構の東北側トレンチ内と西南部から各1片ずつ出土した。学術調査後の保存修理処理の際に2片を接合して現在1片となっている。淡青緑色で、容器外面に浮出円形の切子（カット）装飾をもつという型式学的特徴から、考古学を含めた人文科学の分野では、3～7世紀にメソポタミア・イラン地域を中心に西アジアを支配したサーサーン朝の領域内で製作されたと考えられてきた。古代日本に渡来したガラス製容器の数少ない調査出土資料の1つとして世界的に著名な品である。



写真5 8号遺跡出土 カットグラス碗片



写真6 8号遺跡出土 ガラス製切子玉

ガラス製切子玉（写真6）は、8号遺跡遺構の東北側から9点出土、8号遺跡の盗掘（推定）の後に5号遺跡前木空洞内に収納していた4点を合わせ、計13点が出土した。緑色で、断面が8面体となるように側面を研磨加工した優美な玉である。

切子玉以外のガラス製小玉・丸玉・粟玉（写真7）は、岩上祭祀段階の16号・17号・18号・19号・21号遺跡、岩陰祭祀の形態をもつ4号・6号・7号・8号・23号遺跡から、合わせて4,000点を超える膨大な量が出土した。いずれも彩り豊かで、青色、黄色、緑色、橙色、赤色に大別できるが、青色のものは濃紺から淡青、あるいは緑をおびたものと、色味に幅がある。どの遺跡でも散乱、散布状態での出土だが、7号・8号遺跡では、遺跡の一部分にいくつかの群をなしてまとまって出土している状況もみられ注目される。



写真7 7号遺跡出土 ガラス製玉類

### 3.2 出土遺跡の立地と出土状況

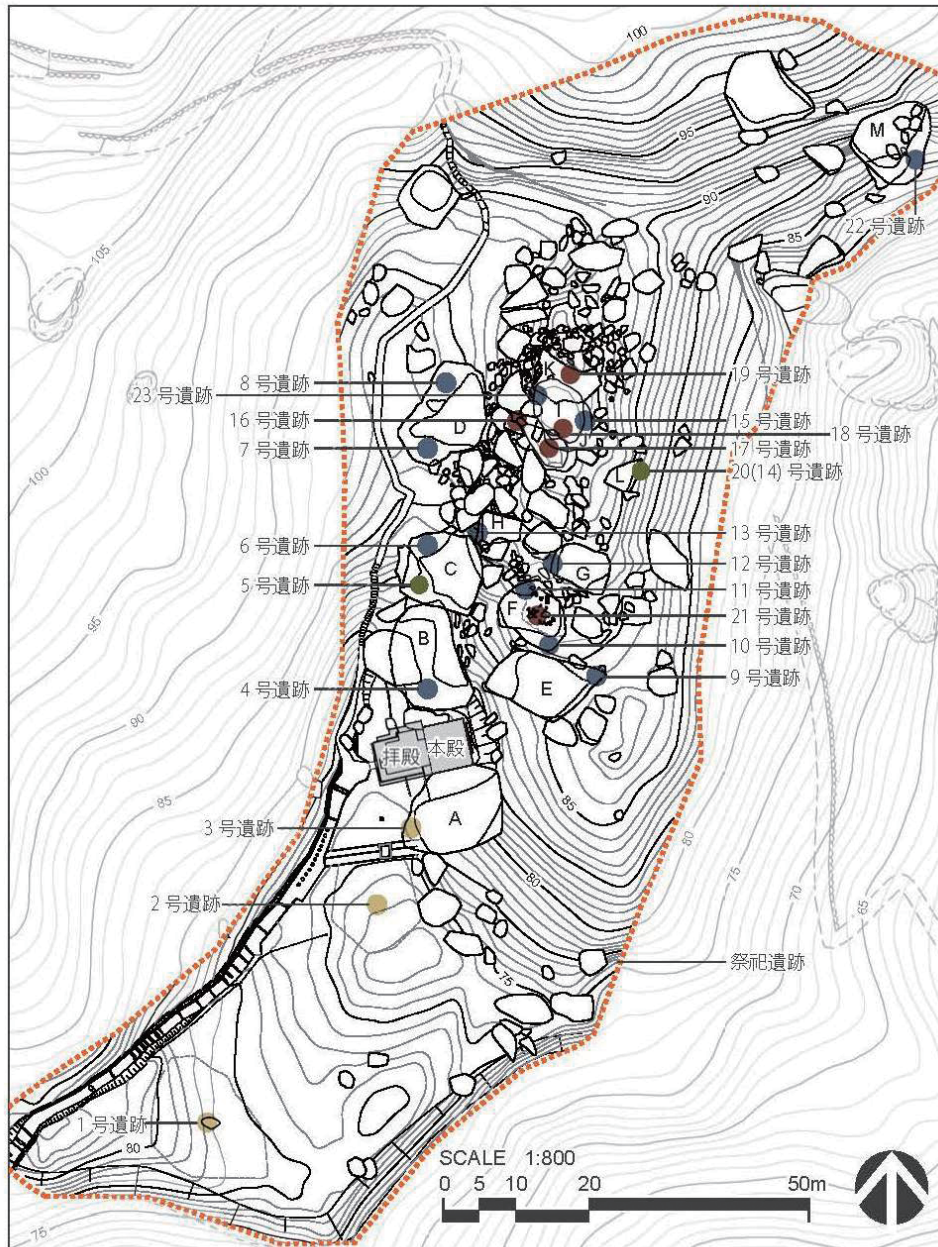
次に、今回の研究調査対象となったガラス製品について、第1次～第3次の沖ノ島祭祀遺跡学術調査報告書（宗像神社復興期成会1958、宗像神社復興期成会1961、宗像大社復興期成会1979）をもとに、出土遺跡の立地と出土状況を述べる。図1発掘遺跡区分図も参照されたい。なお、同報告書からの引用部分は「 」で表記し、ガラス製品と共伴した出土製品の仔細は割愛した。

#### 岩上祭祀段階の遺跡

##### ・16号遺跡

沖ノ島の標高80mにそびえ立つ巨岩群の最北端D号巨岩の東隣にあるI号巨岩は、基底となる岩の上いくつかの岩が重なり合っており、巨岩群において最も高い場所となっている。16号遺跡はI号巨岩の西に累積する基礎岩下の隙間（空洞）と、その前面にあるf岩（平らな大石）の下やf岩北側の平坦地をさす。遺跡には、ガラス製小玉（「青色小玉」「紺色小玉」）が勾玉・管玉や他の製品とともに、空洞内の基岩上の遺物包含層から傾斜する基岩の上、空洞前のf岩周辺の平坦地にかけて散布していた。出土品は、元来、空洞内の基岩上におさめられたものが、長い間に何らかの理由で基岩の傾斜を流れ落ち、空洞前面の窪みに堆積したとみられている。

なお、I号巨岩をめぐる遺跡として、I号巨岩上面に18号遺跡、その周縁に17号、19号遺跡がある。



- 凡例
- 岩上祭祀遺跡 (4世紀後半～5世紀前半)
    - 岩陰祭祀遺跡 (5世紀後半～7世紀)
  - 半岩陰・半露天祭祀遺跡 (7世紀後半～8世紀前半)
    - 露天祭祀遺跡 (8世紀～9世紀末)
  - A-M : 祭祀遺跡を伴う巨岩

図1 発掘遺跡区分図

### ・ 18号遺跡

I号巨岩上に存在する唯一の遺跡。第1次調査では、I号巨岩上面の西南側2m下がった南端部にある〈丙〉岩(大石)付近で、かつ、17号遺跡の真上にあたる場所を18号遺跡と認定したが、第3次調査では、I号巨岩上の北端および西側端の中央部にも石組みや遺物が確認されたため、18号遺跡の範囲は拡大された。本遺跡からはガラス製小玉が出土。第2次調査では、第1次調査で確認した〈丙〉岩下の鏡や石釧が水平に並べられ、その上に積石あるいは敷石をし、上から〈丙〉岩を伏せていることを確認、敷石の間からガラス製小玉3点が発見された。第3次調査でも同じくI号巨岩上の南端(〈丙〉岩付近)で管玉・棗玉・白玉など他種の玉類とともに出土した。

## ・21号遺跡

沖津宮社殿北側のB号巨岩の北東30m先にF号巨岩がある。21号遺跡は、この巨岩上のほぼ中央部にある長方形祭壇遺構をさす。本遺跡からは、ガラス製小玉が他の出土製品とともに祭壇遺構の内側全面に散布した状態で出土した。

## 岩陰祭祀段階の遺跡

### ・4号遺跡（別称「御金蔵」<sup>おかなぐら</sup>）

沖津宮社殿北側のB号巨岩は、その西側にあるやや小さい巨岩に覆いかぶさるようにそびえ立ち、B号巨岩下には空間ができて洞穴状になっている。この洞穴が4号遺跡である。古くから「御金蔵」と称されて存在が知られていた（「御金蔵」の仔細は本稿3.4に明記）。

第1次調査では、遺跡の表面に露出していた土器・滑石製品・鉄製武器・鉄斧・馬具などの採集にとどまった。第3次調査で本格的調査を実施、洞穴の南側入口から5mほどの場所に堆積した黒色腐葉土層に、「淡い緑色」「濃紺色」のガラス製小玉が、古代祭祀にかかわる多種の製品や、中世から現代におよぶ祭祀関係品（祭祀具付属品含む）とともに散乱して含まれていた。

なお、伝御金蔵発見品の来歴をもつ滑石製白玉・子持勾玉・円板・人形・馬形・舟形の一部については、4号遺跡出土と認定して国宝指定を受けているものがある（伝御金蔵発見品の仔細は本稿3.4に明記）。

## ・6号遺跡

巨岩群の最北端D号巨岩の南側にそびえ立つC号巨岩の北側岩陰にある遺跡。岩陰の底下に石を組んで長方形の祭壇を築いており、ガラス製小玉は祭壇遺構の奥右寄りに、他の製品と1カ所にかたまって出土した。

## ・7号遺跡

巨岩群の最北端に立地するD号巨岩の西南側の岩陰にある遺跡。ガラス製小玉・丸玉が遺跡の西部・中央付近・東部（中央付近の東隣）に3群をなして分かれて出土。遺跡の西部では「黄色丸玉」「青色小玉」「緑色小玉」が、中央付近では「黄色丸玉」「緑色丸玉」「青色小玉」「緑色小玉」「橙色小玉」「紺色小玉」が、東部では「黄色丸玉」「青色小玉」「橙色小玉」「紺色小玉」が一群となっていた。

## ・8号遺跡

西南側に7号遺跡があるD号巨岩の北側岩陰で確認された遺跡。遺跡中央の小岩から東北側に設けたトレンチから、他の製品とともに、碗片1片とガラス製切子玉、数多くのガラス製小玉・丸玉が出土。中央小岩の西南部からは碗片がさらに1片が出土。また、中央小岩のすぐ東北に接する形で「橙色粟玉」が群をなし、その一群の北側近くに「黄色粟玉」と「青色小玉」がそれぞれ群がり、各々大量に出土した。トレンチとは別に、中央小岩の東北部では、様々な製品とともにガラス製切子玉2点や他のガラス製玉類各種が散乱、雑

然と出土した。また、切子玉4点とガラス製丸玉15点が、5号遺跡前のタブの木の根元空洞内からも発見された<sup>(2)</sup>。

### 3.3 現存数について

表1は、各遺跡出土ガラス製品の現存数をまとめたものである。全体として小玉が主体である一方で、8号遺跡出土品は種類が多岐にわたっており、数も集中している。8号遺跡の小玉には、小玉の可能性のある紺色丸玉を含んでいる。これは、調査報告の段階で小玉と丸玉の特色の境界がなく判別してないため、その旨反映した。なお、現存数が多い21号遺跡には17号・19号・23号遺跡出土品が紛れている可能性がある<sup>(3)</sup>。

表1 各遺跡出土ガラス製品の現存数一覧

遺跡	カット ガラス碗	切子玉	小玉	丸玉	棗玉	勾玉	管玉	計
16号遺跡			21					21
18号遺跡			68					68
21号遺跡			1529 *					1529
4号遺跡			58					58
6号遺跡			6					6
7号遺跡			461	15				476
8号遺跡	1	13	1214***	6	830			2064
伝沖ノ島出土品**			133			2	1	136
計	1	13	3490	21	830	2	1	4358

■ 岩上遺跡段階 ■ 岩陰祭祀段階

\* 発掘調査後、21号遺跡のガラス製小玉には17号・19号・23号遺跡などの出土品が紛れた可能性がある。

\*\* 本品は調査出土品ではない、沖ノ島出土とされる伝世品をさす。

\*\*\* 8号遺跡のガラス製小玉は、小玉の可能性をもつ紺色丸玉を含む。

### 3.4 伝沖ノ島出土品について

沖ノ島出土品には、学術調査出土品とは別に伝沖ノ島出土品が存在する。伝沖ノ島出土品は、沖ノ島出土という由来をもち宗像大社で大事に保管してきた伝世品で、著名な金銅製高機、金銅製香炉状品のほか、銅鏡、鉄製武器、馬具、金属製雛形品、滑石製形代などとともにガラス製玉類（小玉・勾玉・管玉）が含まれており、現在、学術調査出土品と併せてすべて国宝に指定されている。伝沖ノ島出土品は様々な経緯で伝来しており、来歴によって「伝御金蔵発見品」「旧個人蔵品」、「来歴不詳品」、以上の3種に区分される。

伝御金蔵発見品は、御金蔵で不時発見されたものと伝えられ、学術調査よりずっと以前から辺津宮へ移管されていた品をさす。御金蔵とは、沖津宮社殿の北側にある、B号巨岩

とやや小ぶりの岩との重なりによって自然に作られた洞穴状の空間のことで、ここは、江戸時代には既に文献に記されるなど、沖ノ島祭祀遺跡の中で最も早くから知られていた場所である。御金蔵は、第1次調査で4号遺跡と名付けられた。第3次調査では、この洞穴が5世紀、6世紀には祭場として使用され、平安時代以降は祭祀奉獻品を再収納する収納庫として機能したことを確認し、また、島内の他の祭祀遺跡で偶然露出して採集されたものも神宝としてこの洞穴へ収納したと推測している（宗像大社復興期成会1979、155・163頁）。

旧個人蔵品は、沖ノ島から外に流出し様々な経緯で個人所蔵となった後に宗像大社へ返納された品をさす。流出については、多くの守備隊が駐屯していた戦時中や、昭和26年から20年近くかけて行われた島の漁港築堤工事の期間中など、大社神職以外の者の往来が激しくなった時期に、残念ながら島からの持ち出しがあったとみられている。

来歴不詳品は、いずれも詳しい来歴はわからないが、伝沖ノ島出土品として辺津宮で保管してきたものである。

なお、伝沖ノ島出土のガラス製玉類には小玉・勾玉・管玉があり、「旧個人蔵品」、「来歴不詳品」に分けられる。

以上、本稿では、中井泉名誉教授を代表とする研究調査チームと宗像大社との共同研究として実施した、沖ノ島出土ガラス製品研究調査の成果公表の基礎資料として、同ガラス製品の歴史的背景、内訳、員数、出土遺跡、出土状況、来歴などの基本データをまとめた。本書別稿の理解を深めるため、また、今後の更なる研究活動の折に活用されたい。

最後に、本共同研究を有意義に進め、新しい成果を産み、研究の進展につなげることができたのは、本共同調査のメンバーである、中井泉名誉教授（東京理科大学）、四角隆二氏（岡山市立オリエント美術館）、阿部善也博士（東京電機大学）、村申まどか博士（筑波大学）、加藤千里氏のご熱意とご尽力のお陰です。篤く御礼申し上げます。

（宗像大社文化局）

## 註

- (1) 沖ノ島出土ガラス製玉類の名称は沖ノ島学術調査報告書に準拠している。
- (2) 第2次調査の際、5号遺跡前にあるタブ木の根元の空洞から勾玉・切子玉・白玉等の玉類を発見。いずれも7号・8号遺跡の関係遺物であることを確認した。8号遺跡では遺跡中央小岩両側の盗掘が推測されていることから、盗品の一部（玉類）を本空洞に隠した可能性を指摘している。（宗像大社復興期成会1961、235頁）
- (3) 平成18年の沖ノ島出土品国宝一括指定の際、ガラス製品の出土数と現存数は少々差異があることを確認している。なお、国宝一括指定の仔細は別稿（重住ら2010）の35頁注（7）に詳しい。

## 参考文献

- 宗像大社復興期成会 1958『沖ノ島 宗像大社沖津宮祭祀遺跡』  
宗像大社復興期成会 1961『続沖ノ島 宗像大社沖津宮祭祀遺跡』  
宗像大社復興期成会 1979『宗像沖ノ島』  
重住真貴子・水野敏典・森下章司 2010「3.沖ノ島出土鏡の再検討」『考古資料における三次元デジタルアー



カイズの活用と展開』

平成18年度～平成21年度科学研究費補助金 基礎研究(A)(課題番号 18202025)研究成果報告書 奈良  
県立橿原考古学研究所

